

そよ風を地域に吹き込む学生プロジェクト

株式会社バード・デザインハウス 竹岡 寛文



はじめにー活動の背景

私がかつて在籍していた滋賀県立大学は、地域に根ざした大学として1995年の開学当初より「キャンパスは琵琶湖、テキストは人間」というスローガンのもと、様々な地域貢献活動に取り組んでいる。授業、研究室活動の他にも学生の自律分散的な活動も見られた。そうした実績が認められ、2004年からは文部科学省の現代的教育ニーズ取組支援プログラムⁱ⁾に「地域活性化への貢献」部門で採択され、スチューデントファーム「近江楽座」ⁱⁱ⁾という旗印を掲げ、それまでそれぞれに活動を展開していた研究室やチームが束ねられ、技術的・資金的援助などを受けて、さらに活動が加速する。

そんな学生の自律分散的活動のひとつとして、近江楽座が始動する半年前、私は大学の所在する彦根市の隣町、豊郷町で学生NPO「とよさと快蔵プロジェクト（以下、快蔵プロジェクトⁱⁱⁱ⁾）」を立ち上げていた。このプロジェクトは、2500世帯ほどの町内に100軒はあるという空き家や空き蔵を再生し、活用していこうという目的を持って活動を開始した。活動は、地元の30代を中心メンバーとして2000年に立ち上げられたNPO法人（法人化は2004年）「とよさとまちづくり委員会（以下、まちづくり委員会）」と協働で進めている。本稿では、この「快蔵プロジェクト」の活動について紹介し、学生と地域が協働して進めるまちづくりの可能性について考察したい。

プロジェクトの理念と活動

快蔵プロジェクトは当初、私を中心に数人の後輩が参加する10人未満の小規模なグループであ

った。その構成は、環境・建築デザインを専攻する学生が中心で指導教員は意図的につけなかった。それは地域住民と対等な立場でプロジェクトを進めたかったからに他ならない。それまでいくつかの地域活動に参加した経験から、大学の関わる活動において、地域の方は大学教授の肩書きに臆し、発言力が弱まってしまうと感じていた。その点、学生は未熟で地域の方も「よし、教えてやろう」というような意識を持ちやすい。しかし、一方では学生ばかりのプロジェクトはなかなか信用が得られず、地域から不審な目で見られることも少なくなかった。

民家の改修に関しては、まず、まちづくり委員会が空き物件の賃貸交渉を行なう事から始まる。地元の情報に精通し、地域からも比較的認知され、信頼できるNPO法人だからこそ貸し手も安心できる。交渉の対象となる物件の多くは、十から数十年近く空き家になっているが、年に数回の法事の時だけ遠方から帰ってきたり、全く使っていないが先祖から譲り受けた家を自分の代で取り壊すのは...、と空き家にしている物件で、地域の安全防災上も問題となっている場合が多い。基本とな



改修前の民家



作業風景(土間づくり)

i) 詳細は、下記文部科学省ホームページへ。http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/kaikaku/needs.htm

ii) 学生が主体となって地域活性化に貢献する活動を行うプロジェクトを学内で公募、選定し、採択されたプロジェクトの活動を3つのサポートシステムで援助する取り組み。文部科学省からの支援が切れた4年目以降もほぼそのままの形で大学の独自財源を投入して継続している。詳細は、「近江楽座学生委員会編著『近江楽座のスズメ』ラトルズ2008」または近江楽座ホームページへ。<http://ohmirakuza.net/>

iii) 日々の活動等は下記ホームページ・ブログで公開しています。(HP) <http://www.kaizo-hp.com/> (blog) <http://toyotoyo.wablog.com/>

る賃借条件は(1)10年間無償で借り受けるが(2)改修や修繕にかかる費用、賃貸期間の固定資産税や管理費は借り手であるまちづくり委員会が負担し(3)その後は住める(使える)状態で貸し主に返却する。そして、この10年の間にまちづくり委員会は、学生シェアハウスとして学生に間貸しをして賃料を取り(1人1室+風呂・トイレ・台所・居間・食堂共用、水光熱費込駐車場付2万5千円)、次の物件改修費用(あるいは初期改修費用の補填)に充てる。また、居住環境を整えて貸し主に返却する事で、Uターンや二地域居住など移住のハードルを下げる効果も期待している。

しかし、数十年空き家になっていた物件は、傷みが激しく改修費用がかさむ。そこで、まちづくり委員会のメンバーでもある地元大工さんや配管工の方の協力を得て、学生たちが労働力を提供し、コストを最小限に抑える。もちろん学生はボランティアであるが、建築を学ぶ学生にとっては大変貴重な実践学習の現場となっている。作業は、土日と大学の長期休暇(夏・冬・春)が中心で、工期は非常に長くかかる(1年に2軒が限界)が、それが当初想定していなかった地域との関係を生んでいる。作業時には「只今改修中」の看板を掲げて、近隣の住民の方に現場見学してもらえようような雰囲気づくりを心がけている。長い工期は、その機会を十分にもたらし、シェアハウスに学生が入居するまでの緩衝期間となっているのである。当然完成したシェアハウスには改修に関わり、その家に愛着を持った学生が多く入居する。入居する頃には彼らに対する住民の理解も高まり、「地域のためにこんなに頑張ってくれている学生さんたちなら…」と温かく迎え入れられる。



「只今改修中」看板



作業風景(門の移設)

活動の展開(3年目以降の活動)

快蔵プロジェクトは、1年目、2年目、と改修の実績を重ね、3年目には2つの方向への大きく展開する。

1つは空き蔵を活用したバー^{iv})の計画である。この計画は快蔵プロジェクトを立ち上げた年に大学に入学し、快蔵プロジェクトに参加、プロジェクトとともに成長してきた当時3年生メンバーから企画が持ち上がった。酒蔵に隣接する敷地で物置蔵として放置されていた蔵を改装し、地域の人が集い、そこに暮らし活動する学生との交流の場として活用することを目的とした。経営母体はまちづくり委員会であるが、実質的な経営・運営はほとんど全て学生が行い、開店から3年を過ぎた現在も毎週金土の営業を続けている。当初の目的通り、様々な人が集う交流の場として定着している。

もう一方は、学生シェアハウスの発展型としての福祉事業とのタイアップである。これは2年間の活動実績が地元でも認められ始め、地元社会福祉法人がまちづくり委員会に声をかけた事がきっかけとなる。県や町の補助を受けて、これまでの学生シェアハウス同様に快蔵プロジェクトがまちづくり委員会と協働で改修を手がける。改修後は、学生が住まうと同時に共用部分(居間など)を週3日程度10時から17時の間「地域の縁側」として開放している。1人暮らしの高齢者をはじめ、地域住民の憩いの場としてサロンのように活用されている。計画時には、実際学生が地域の人たちと半共同の生活ができるだろうかという不安もあり、玄関、トイレ、台所はシェアハウス部分と縁側部分の両方に設けた。しかし、いざ運営を始めると、学生とそこに集う地域のおばあちゃんたちの関係は非常に良好で、学生の乱れた食生活を見かねて「おかず冷蔵庫入れといたよ」「鍋に大根炊いてあるから食べなさいね」といった家族のような会話が飛び交う。結局はシェアハウス専用の玄関やキッチンはほとんど使われないという嬉しい誤算となった。また、改修の初期費用の大部分が補助により賄われているため、縁側部分の運営費(水光熱費など)は学生からの家賃を充て

iv)下記ブログよりイベントなどの最新情報をご覧ください。http://tartaru.blog66.fc2.com/

で継続していけるシステムとなっている。言い換えれば、学生が地域福祉の一端を担っているのである。

さらに、快蔵プロジェクトの発足から6年目の2009年には、派生プロジェクトとして「とよさらだ^{v)}」というチームが立ち上がった。これは、「地域の縁側」に集う元気なおばあちゃんたちと、空いたビニールハウスを活用してベビーリーフなどの野菜を作り、安全安心な野菜を大学の生協に提供する地産地消の取り組みで、食の安全・安心がさげられる時代の中で注目を集め、既に新聞やテレビでも取り上げられている。

このように、活動6年目を迎えて学生と地域との交流のチャンネルは多様化し、その内容についても徐々に密になっている。また、単なる交流のみならず、学生が地域の一構成員として無理のない範囲で地域をサポートするシステムは、地域にとけ込みながらも、絶えず新しい風を吹き込む役割を担っている。



コミュニティバー
「タルタルーガ」



地域の縁側「おやえさん」

まとめ—プロジェクトの継続

時にまちづくりの現場で学生は嵐のように例えられる。たしかに地域に新しい風を吹き入れるが、それは突風で、好き放題荒らしてあっという間に過ぎ去っていく、というのである。

私は学生がまちづくりに関わる際の最大の課題は「継続」であると考えている。4年ないし6年でメンバーの入れ替わる学生のプロジェクトにおいて世代交代は欠かすことができない。快蔵プロジェクトでは、ショートスパンのリレーでバトンをつなぐことと、学生の多様な関わり方をプロジ

ェクトとして容認することの2点に強く意識して活動してきた。

1点目については、プロジェクトの代表は2年間である程度経験を積み、時間的にもまだ余裕のある3回生が務め、基本は毎年の交代としている。そして2点目は、プロジェクトを中心的に進めるコアメンバーの他に地域のイベントの時だけ手伝いにくる学生や、改修などには特に関わってなくてもシェアハウスに住む学生など、それぞれに自分にあったスタイルでプロジェクトに参加することをよしとしている。それはプロジェクト構成員の裾野を広げ、厚みのあるチームにするためであり、時にコアメンバーを支える大きな力となる。こうして様々な学生が地域と関わり合い、常に心地よいそよ風を地域に吹き入れられるような存在を目指した。活動の理念や精神を受け継ぎながら、様々な活動を展開し、立ち上げから5年である程度の実績や成果を残したが、真価が問われるのはこれからだと私は感じている。

また、この「継続」という点に関して、地域側の理解も必要になる。地域は毎年出ては新しく入ってくる学生たちと気長に付き合い、時にはパートナーとして、また時には教育係として接していなくてはならない。

空き家対策を始め、地域の様々な課題解決をはかりたいまちづくり委員会や地域の住民、机上だけにとどまらず実践的学習の現場を求めている学生たち、それぞれがメリットを感じながら自分たちの強みや特性を持ち寄り、一緒に楽しんで活動できることが、継続の秘訣であろう。こうした些細な関係性の中に、学生が関わるまちづくりの新たな可能性があるのではないかと思う。

v)下記ブログより日々の活動をご覧ください。http://http://tgmp.blog81.fc2.com/